

Roderick Hudson におけるイタリア人表象 アンコーナ出身の Giuseppe Giacosa

齊藤 園子

はじめに

Henry James の初期の長編 *Roderick Hudson* に登場するイタリア人、Giuseppe Giacosa に着目し、James 作品におけるイタリア人表象を考察する。*Roderick Hudson* は主にローマで物語が展開する小説だが、ローマが舞台とはいっても、物語の焦点はローマの芸術家コロニーに向けられている。そのコロニーに出入りする人物の多くは外国にルーツを持つが、その中の数少ないイタリア人の一人が Giacosa である。彼には謎が多い。Christina Light の母を長年知る人物として Light 母娘の社交生活を支えるが、その理由は明示されない。“The Cavaliere”（騎士）と呼ばれる一方で、Christina からは飼い犬のプードルと同列の扱いを受けている。ローマ人として振る舞うが、実はアドリア海沿岸の街アンコーナ出身であるらしい。終盤には、実は Christina の血筋上の父であるらしいということがわかり、Christina が公爵夫人の座に落ち着いた後は、故郷のアンコーナに戻ったとされる。終始、正体が不明な Giacosa であるが、なぜアンコーナ出身なのだろうか。彼がアンコーナ出身であることに着目する研究は少ないが、この設定は、James 作品におけるイタリア人表象を検討する上で重要な要素だと考えられる。

1. James によるイタリア人表象

James は生涯でイタリアを 14 回、またローマだけでも 8 回は訪れたとされる。ローマを含め、イタリアの都市は数多くの作品に登場するが、James によるイタリアとイタリア人の表象については、類型的なイメージの域を出ないとする見方が主流である。Christina Giorcelli は、アングロサクソン系の訪問者が、地中海の人々に対して、オリエンタリズム的な意味での「東洋人」に対するものと同じ眼差しを注ぐ傾向があったことに触れ、James も例外ではないとし、ローマやローマ人が、ステレオタイプ的な観念で描かれていると指摘している (220)。Giorcelli は、旅行記や書簡を通じて見られる James のローマやローマ人との関係は概して「表面的」だが、フィクション作品においては、ステレオタイプを掘り下げ、「普通の観光客」よりは深い洞察を展開していると考えている (229-30)。しかしノンフィクション作品においても James は、イタリア各地を訪れた経験を踏まえて、イタリア的な美しい情景の一部を成すかのようなイタリア人のステレオタイプ的なイメージの背後に、個々人の差異を見抜いているように思われる。例えば、“Italy Revisited”のジェノヴァ近郊の町を訪れた際の一節には、外見がかき立てるイメージとは相反するイタリア人の現実の有り様が書き留められている (*Italian Hours* 107)。James のノンフィクションに残されているような観察が作中のイタリア人を形作るのであって、その洞察は「普通の観光客」とは異なる類のものであるように思われる。美しい情景の一部としての外見から折に触れて立ち現れる、個人としてのイタリア人の姿が、Giacosa の謎めいた人物像に反映されているのではないだろうか。

2. アンコーナと James

アンコーナは、イタリアのアドリア海側に位置する港湾都市である。東方への玄関口であり、中世にはアンコーナ共和国という海洋共和国が存在した。James の著作内での記述は多くはないが、アンコーナは紀行文や執筆ノート、フィクション作品に登場する。“Siena Early and Late”という紀行文では、シエナ出身のローマ教皇ピウス二世が、十字軍の出発地としたアンコーナで死去したことに言及している (*Italian Hours* 233)。またアンコーナは、James 自身が列車でローマからヴェネツィアに向かった際の経由地でもある (*Notebooks* 222)。ローマとヴェネツィアを結ぶ経由地としてのアンコーナは、*The Portrait of a Lady* にも登場する。Osmond との結婚を決めた Isabel は、姉一家をロンドンで見送った後、イタリアに向かう。まずヴェネツィアを訪れ、その後、ローマを目指す。内陸のフィレンツェを経由するルートではなく、アンコーナ経由を選ぶ。Touchett 夫人が暮らす街を迂回したことになり、後に Isabel はフィレンツェに立ち寄らなかったことを夫人に詫びている (*Portrait* 273-74)。

3. 中間者としての Giacosa

Rowland には Giacosa が個性を持たない「蠟人形」(*Novels* 276) のように感じられるが、その一方で、実は個性を内に秘めているようにも思えて、惹きつけられる。Giacosa の捉えがたい人物像は、次の会話に現れている。

“I have two hearts,” he said, “one for myself, one for the world. This one opposes Miss Light, the other adores her! One suffers horribly at what the other does.”

“I don’t understand double people, Cavaliere,” Rowland said, “and I don’t pretend to understand you.” (*Novels* 435)

Giacosa は「二つの心」を持っており、一つは自分の、もう一つは“the world”のための心だという。ローマ出身を

演じるのも「二つの心」に基づくものと言えるが、彼がローマ人を演じるのはなぜだろうか。付き添いがローマ人である方が、社交の場（the world）において Christina の上昇婚に有利に働くからだと考えられる。その社交の場は、Rowland をはじめ、様々な言語文化的な背景を持つ人々が入り交じる外国人のコロニーである。つまり“the world”は文字通り、国際的な「世界」でもあると言えるのだ。Giacosa はローマ人として振る舞うことで、外国人が「永遠の都」に対して抱くイメージを利用するのである。このコロニーでは、文化的な帰属性が曖昧な人々が、英語で意思疎通を図っている。Giacosa が操るのはイタリア英語である。Christina も文化的な帰属性が曖昧である。母方の祖母はイギリス人女優、祖父はアメリカ出身の画家で、父の Light 氏はアメリカ人で領事だった。Christina はローマ育ちだが、母に連れられてヨーロッパ各地を転々としてきた。そのため彼女が話す英語には「わずかに外国訛がある」（*Novels* 266）とされる。Christina は常に自分を演じているが、このような多様な文化的属性を背景に、常に自分が何者であることを意識し、複数の属性を操らざるを得ない状況にあると言えるだろう。Madame Grandoni や彫刻家 Gloriani も同様に文化的な帰属性が曖昧である。Giacosa は、こうした文化の中間者が集まるコミュニティにおいてこそ、自身の位置取りを操作し、存在感を示すことができるのである。

4. Giacosa 以降のイタリア人——Prince Casamassima と Amerigo

Giacosa の中間的な位置取りは、Giacosa 以降のイタリア人に継承されているように思われる。Prince Casamassima もその一人である。James は長編 *The Princess Casamassima* に公爵を再登場させているが、その描写には変化が見られる。*Roderick Hudson* では、容姿にも性格にも特別な魅力はないが、伝統のある家系に生まれた貴族としての社会的地位と財産がその存在を正当化する人物として説明される。「正確な英語を話す」（*Novels* 318）とされるが、小説内での発言の機会は少なく、公爵の心理は周囲の人々の憶測に委ねられている。一方、*The Princess Casamassima* においてはより多くの発言の機会が与えられている。本作品では、イギリスを舞台に、それぞれ特徴のある英語を駆使して、ヨーロッパ各地の思想家や革命家が策動する。そのような国際的なコミュニティの一角で、公爵も自らを自らで表現するしかないのだ。周囲がその意志を憶測に基づいて代弁する人物像から、外国語を用いて自らを表現しようとする人物像への公爵の変化は、より普遍性を有する人物像への変化と捉えることができるだろう。James 後期の作品 *The Golden Bowl* の Amerigo は、さらなる変化を経ている。彼はローマの歴史のある貴族の末裔とされるが、語り手が描くその姿は文化的アイデンティティが自明ではない人物のものである。語り手は Amerigo を、「上手すぎる」ほど流暢な英語を話し、イギリス人の眼から見ても「異国風」に見えない、アングロサクソンの要素を併せ持つ人物として描いている。さらに Amerigo 自身、自分の流動的なアイデンティティを意識している。彼は Maggie に対して、Adam Verver と対等に渡り合うためにアメリカ式の英語を練習している、と発言する（28-29）。James は登場人物が話す英語から出身地や地域がうかがえる状況を描き出してきたが、この Amerigo の言葉が示すのは、意識的な英語の操作であろう。彼は、自分が話す英語の文化的な属性を意識的に変えることにより、自分の存在に新たな意味を付与することができると気づいているのだ。

おわりに

James が描くイタリア人登場人物は、典型的な性格を残しながらも、様々な文化的属性をもった登場人物の中で、イタリアという属性が、複数の属性の中のひとつにすぎないような人物像へと変遷していると言えるだろう。その初期の萌芽は Giacosa にすでに現れていると言える。現在のアンコーナは、イタリア屈指の観光都市というわけではない。しかし東方への玄関口、ヴェネツィアとローマを結ぶルートの経由地としてのアンコーナの位置づけは、典型的なイタリア人表象から、国際的な環境に生きる、様々な属性を保有したイタリア人表象へと移行する通過点としての Giacosa に投影されているように思われる。

Giorcelli, Christina. “Beguiling City, Bewitching Landscape, Bewildering People.” *The Henry James Review*, vol. 33, no. 3, Fall 2012, pp. 216-32.

James, Henry. *The Complete Notebooks of Henry James*, edited by Leon Edel and Lyall H. Powers, Oxford UP, 1987.

—. *The Golden Bowl*, edited by Ruth Bernard Yeazell. Penguin, 2009.

—. *Italian Hours*. Penguin, 1992.

—. *Novels 1871–1880*, edited by William T. Stafford. Library of America, 1983.

—. *The Portrait of a Lady*, edited by Robert D. Bamberg. Norton, 1995.

—. *The Princess Casamassima*, edited by Derek Brewer. Penguin, 1986.

*本研究はローマ・サピエンツァ大学（Sapienza Università di Roma）の客員教授・研究員制度（Professori visitatori 2024）による助成を受けた研究成果の一部である。